

平成16年度試験研究成果書

区分	普及	題名	小麦品種「ゆきちから」の目標生育量と栽培法		
[要約]「ゆきちから」の秋播き栽培では収量が360～420kg/10aで、原粒タンパク含有率11.5%以上を目標とする。その際、播種量は密条播で6～8 kg/10aとし、基肥を「ナンブコムギ」慣行と同量する。追肥は窒素成分で融雪期 2 kg/10a、穂揃期 4 kg/10aをそれぞれ施用する。					
キーワード	小麦	ゆきちから	秋播き栽培法	○園芸畑作部 野菜畑作研究室 県北研究所 やませ利用研究室	

1 背景とねらい

平成15年に製パン適性が高く赤さび病に強い小麦品種「ゆきちから」(育成：東北農業研究センター)が県奨励品種に編入されたが、実需者からは製パンに向く品質の確保と安定的な供給が求められている。

そこで、「ゆきちから」の収量の安定確保と、製パンに適する子実原粒タンパク含有率11.5%以上の確保をはかるため、秋播き栽培における栽培法を示すものである。

2 成果の内容

(1) 播種法及び施肥法 (図1、2、3)

ア 播種期は「ナンブコムギ」の秋播き栽培に準じる。

イ 播種量は密条播で6～8 kg/10aとする。

ウ 基肥は「ナンブコムギ」慣行と同量(窒素成分が4 kg/10a程度)とする。

エ 追肥は融雪期と穂揃期にそれぞれ窒素成分で2 kg、4 kg/10aを施用する。

(2) 穂数350～450本/m²を目標生育量とし、期待収量は360～420kg/10aである。また、収量を確保するための越冬後茎数は1300～1850本/m²である (図4、5、6)。

(3) 生育診断

ア 越冬後茎数が1400本/m²未満の際には融雪期追肥量を4 kg/10aに増やす (図6)。

イ 原粒タンパク含有率11.5%を確保するという観点から、止葉抽出期の有効茎数が500本/m²以上であれば、穂揃期追肥は2 kg/10aに減じて良い (図7)。

3 成果活用上の留意事項

ア 成果内容は主に農研センター(北上市：普通畑・黒ボク土)におけるデータにもとづいており、各地域の気象条件、圃場条件に応じて播種量、施肥量等を調節すること。

イ 「ナンブコムギ」とは追肥の時期及び量が異なるため注意すること。

ウ 「ゆきちから」は穂発芽し易く、成熟後の品質低下が「ナンブコムギ」よりも早いため、収穫適期に達したならば速やかに収穫すること。

4 成果の活用方法等

(1) 適用地帯又は対象者等 県内全域(普及見込み面積 200ha)

(2) 期待する活用効果 製パン適性に優れる小麦の安定供給

5 当該事項に係る試験研究課題

(858) 高製パン適性小麦品種「ゆきちから」(東北214号)の高品質・安定多収栽培技術
(1000) 県央・県南地域、(2000) 県北地域[H14～H16、国庫]

6 参考資料・文献

(1) 岩手県農業研究センター 平成12～16年度試験成績書(一部未定稿)

(2) 平成14年度岩手県農業研究センター試験研究成果 品種 小麦 製パン性が高く耐病性に優れる「ゆきちから」

(3) 麦類新品種の特性と栽培ポイント(麦類良質品種実用化・普及促進協議会 平成15年)

7 試験成績の概要（具体的なデータ）

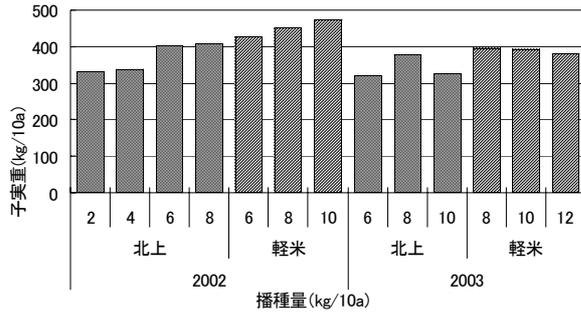


図1 播種量と収量の関係（2002～2003年産；北上、軽米）
注：施肥窒素成分は基肥で北上4kg、軽米6kg、融雪期に2kg、止葉抽出期に2kg/10aを施用した。

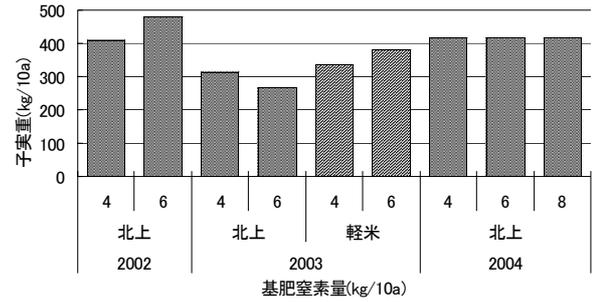


図2 基肥窒素量と収量の関係（2002～2004年産；北上、2003年産；軽米）
注1：播種量は北上6kg、軽米8kg/10a。
注2：追肥窒素は融雪期2、穂前期2（kg/10a）

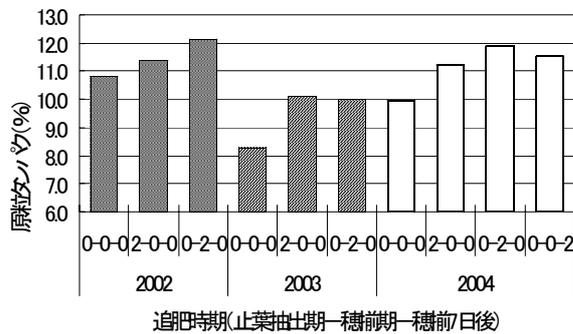


図3 追肥時期と原粒タンパク含有率の関係（2002～2004年産；北上）
注：播種量6kg/10a、基肥と融雪期にそれぞれ窒素成分で4kg、2kg/10aを施用した。

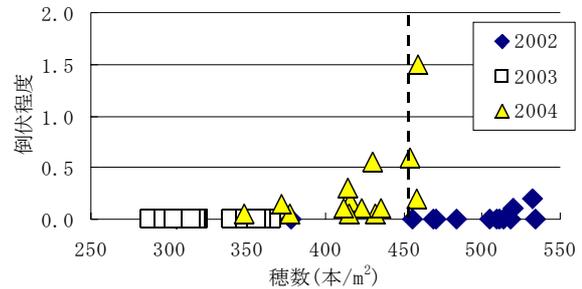


図4 穂数と倒伏の関係（2002～2004年産；北上）
注：倒伏程度は0（無）～5（甚）

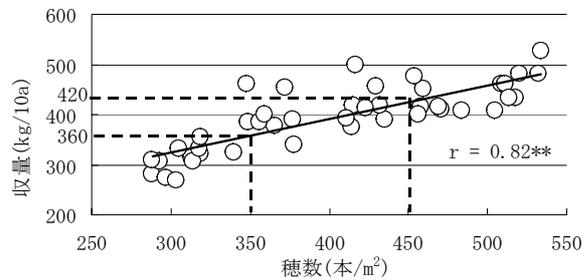


図5 穂数と収量の関係（2002～2004年産；北上）

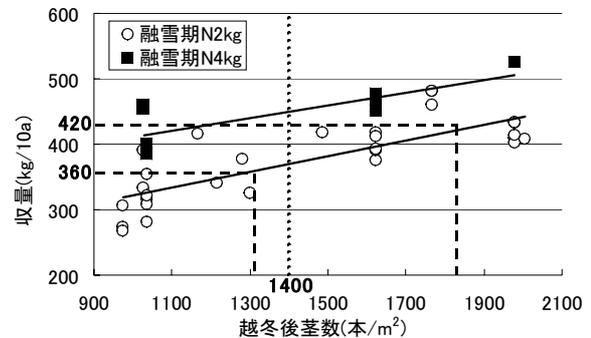


図6 越冬後茎数と収量の関係（2002～2004年産；北上）
注：後期追肥は窒素成分0～4kg/10aを1回のみ施用した。

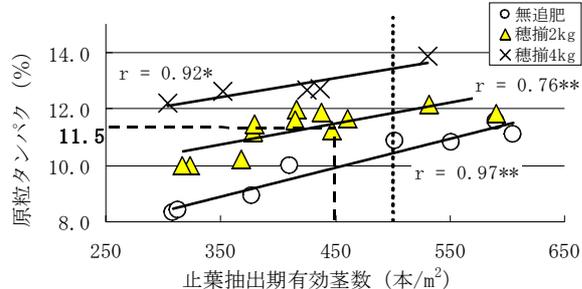


図7 止葉抽出期有効茎数と追肥条件ごとの原粒タンパク含有率の関係（2002～2004年産；北上）